

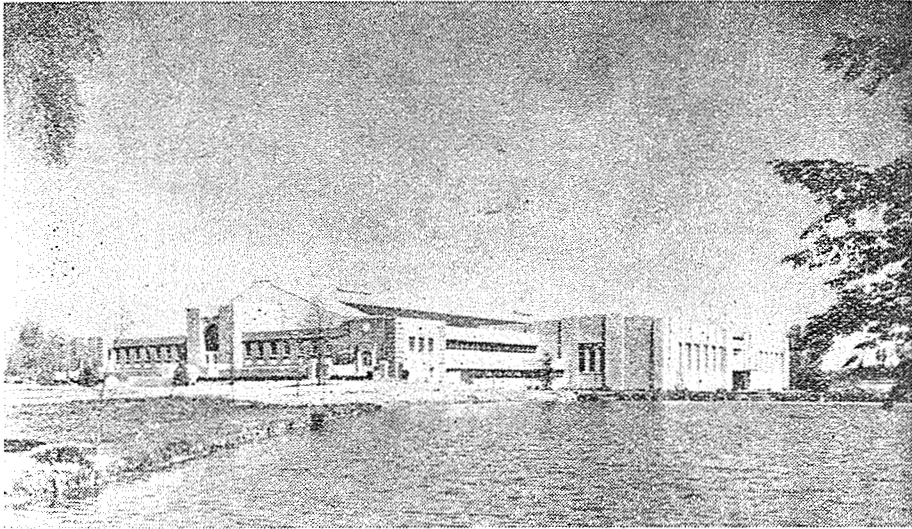
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka. August 15th, 1952. —No. 251

關西大學學報

第 2 5 1 号

昭和27年8月



米國ローレンスヴィル学園
のフィールド・ハウス

關西大學學報局

政治力の強化

岩崎卯一

最近に、かなり名を知られている大阪の一実業家ととりとめもない雑談を交した際に、その人の口から、次のような意味ふかい言葉を聞いた。「吉田首相は、外交界の第一人者ではあるが、国内の政治についてはもとと素人だから、小者の側近者輩から誤まられているようだ。このごろでは、その政治力も目立って弱ってきている。だから、これからの政治担当者は、国内の人心を充分に安定し得るような強い政治力をもつた人でなければならない。」

「政治力の強化」という声は、はやくも巷に流れたようだ。ところで、この声は、わたくしの長い一生中で、これまでもしばしば耳にしてきたものである。これが最も高くそして廣く叫ばれていたのは、大正六年原敬内閣にはじまつた歴代の政界内閣が、その爛熟期に達し、「政党内でなければ人ではない」ように言われた昭和時代の初めごろであつた。當時の朝野二大政党は、国利民福という看板こそ麗々しく掲げてはいても、実のところは、ともに政權争奪の泥仕合に血道をあげていた。国民大衆も、はじめの頃は議會内の乱闘騒ぎなどを、スポーツでもあるかのように興味本位で眺めていたが、のちに本當に愛想をつかして、政党政治に代るなんらか新しい政治体制の出現を要望するようになった。かくて、新開維新などが、政党の無力や腐敗を大げさに宣傳した結、これに刺戟されて起つたのが、血氣にはやる陸海軍の青年將校達であつた。五・一五事件とか二・二六事件などは、かような政界の雰囲気から生みだされたものであつた。その後、政党政治を打倒した軍部の独裁政治は、結局わが国を取巻く悲惨に導きはしたが、その出発点では、無力な政党政治にたいする国民大衆の失望と不信とを足掛りとして擡頭した新政治体制であつた。

歴史はくり返すといわれる。終戦から独立までの七ヶ年間、聯合軍側から投げ與えられたものを拾つた恰好で、なんの苦勞もなく政權にありついている現在のアブレ政党政治家達は、宿敵軍閥からの脅威もないなかで、極めて呑気に、政權争奪の遊戯に忙殺されている。

だが、終戦後のわが国には、わたくしが若いころ、第一次大戦後のドイツとイタリーとで、目のあたりに眺めて来た諸現象と、ほとんど同じようなものが続

々と現われている。ファッショ政權やナチス政權が擡頭してきた前夜の光景が、第二次大戦後のわが国にも、再び出てくる。敗戦、政体の變革、軍事の崩壊、社会党ないし自由党政權による議會政治、新憲法の制定、労働組合の擡頭、これを背後から支配する共產党の飛躍、政治的セネストの反覆、工場占領や政府機關の演進、武力蜂起、有識中産階級の没落、これら一連の諸現象が、一九一八年から數年間イタリーでもドイツでも、走馬燈のように送迎された。

かような国家社会の狀態を前にして、両国の国民大衆は、生粋の共產黨員とユダヤ人とを除けば、祖國の安危に衷心からの憂慮を示し、救國の偉人を待望する心情に迫られた。その場合の要望も、また「政治力の強化」であつた。これが、ムッソリーニやヒットラーに適用されて、ファッショ獨裁政治に轉化したのである。

ひるがえつて、現下のわが国をみると、不思議な光景が、さかんに新聞写真となつて現われている。國權の最高機關であるべき國會では、「選良」として自他共に許している相當年配の議員達が、議長席をかこんだ壇上で、お互になぐりあいをはじめたり、時には守衛達と格闘をやつてゐる。しかも喧嘩のあとでは、必ず「全責任は相手方にあつて、自分の方には寸毫もない」というような虫のよい声明書を出して大威張りである。また、最高学府たることを誇る大学でも、一部のいわゆる「進歩的」な生徒は、日雇労働者達や日本語も不自由な在留外人達と一緒になつて、戦争末期に軍部がわれわれ民間人にも持たつたことを強要したような原始兵器を持ち、軍隊らしく隊伍を整えて行進し、時には同年配の若い警官達と闘争し、互に傷つけあいをやつてゐる。そんな場面を撮した新聞紙上の写真を、虫眼鏡で拡大してみると、大学生だぞといわんばかりに、一部の青年達は、几帳面にも、角帽を頭の上に乗せてゐる。わたくしのように、三十年のながい間、大学だけの祿を喰んできた者には、「大学というものはこんなにも權威のあるものだ」と彼等によつて宣傳されているように思われ、思わず微笑が頬に浮ぶのを禁じ得ない。

強い政治を一番嫌うはずの実業家が、すでに「政治力の強化」を洩らしはじめた。春過ぎれば夏来る。あるいは、英雄待望論が、新装をつけて巷にあふれる時代が来るかもしれない。いまでも少數の評論家達が「逆コース時代だ」などと皮肉つてゐるが、火油瓶が爆弾になり、竹槍が機関銃になり、互に隊伍を整えた兩陣營の国民同志が相撃つ悲惨をみない間に、議會政治家も學閥生活者も、「政治力の強化」という声を、今一度じっくり考えてみる必要があろう。

(法学部教授)

デューイの見た日本

藤田進一郎

本誌第二四九号所載大小島教授の『ジョン・デューイについて』を興味ふかく読み、このアメリカ随一の哲学者、教育学者に対する追憶を新たにした。デューイ博士が日本から中国へかけて旅行されたのは、一九一九年（一九二一年再遊）であつたが、その東洋初旅の途中から、おりにふれて家族に書きおくれた手紙がイヴリー嬢によつて編集され、『Letters from China and Japan.』と題してニューヨークで出版されたのは、一九二〇年の春であつた。ちようどその頃私は朝日新聞特派員としてニューヨークにいたが、博士の滞日中のこともよく耳にしていたので、そのインスツルメンタリズムの哲學的見地——理性も良識も、ある超越世界に鎮座しながら、それ自らに関心をもち、それ自らの高貴な様相のみを観察しつつ、下界の實際社会におこるさまざまな事象を観察する青白き傍観者たるのではなく、下界の實際社会を本来の故郷とし、生きた人生のうちに作用しつつあるものもろの勢力の批判者たり統制者たることを機能とする——という見地から、日本や中国の社会的、政治的動きを、どういふふうに見ておられるかを知りたさの好奇心から、早速通説したのであつた。

ところが日本からの手紙は、ほとんどみなといつていふほど、社交的な歓迎会や招待会の報告で、着かざつた美しい婦人の姿態やゲイシャ・ガールの踊りなど

を例の流暢な文章で、簡潔に、淡々と書き流した罪のないものばかりで、たまに社会問題や政治問題にふれても、単に筆のついでにすぎず、しごくお座なりに片つけてしまつてゐるが、一旦日本をけなれて中国にいたり、上海、南京、北京と遍歴するようになってから手紙では、中国の事態と同時に、必ず日本のことも引合に出し、『making comparisons is a favorite, dangerous, indoor sport.』など、シヤレながら、今まで日本にいた時とはまるで別人のような峻厳な態度をもつて、痛烈な批評を下しているのである。むしろ手紙のことであるから、結論だけである。会つて話せば、もつと詳しい説明がきけるだろうとおもつて日本からの紹介状ももつていたので会見を申しこんだところ、快く承諾され、いついかにアパートで夕食の準備をして待つてゐるからとのことであつた。アリス夫人やイヴリー嬢とともに家庭料理の御馳走を頂きながら、一夕の歓談をほしきまにし得たのである。手紙の中にも記されているいろいろの題目について質問すると、別に『The Dial』や『The New Republic』に掲載されていた手紙とおなじ題目についての寄書なども示されうちとけて卒直な意見をきくことが出来た。そのうち、今日の内外情勢から見て、興味があり、参考にもなると思はれるふしだけを摘記してみる。なお博士が一九一九年十月三回にわたつて『The Dial』に寄稿した『Liberalism in Japan.』並に同年七月十六

第二五一号 目次

巻頭言	岩崎卯一(一)
デューイの見た日本	藤田進一郎(二)
学内報	(三)
文部省科学研究費交付——就職講座開講	
——体育実技館起工式——文藝講演会——ローマ法特別講義——新聞学特別講演	
会開催——独文学会総会——堀、森川両	
授地方講演——計報——教授出張——学	
内人事——学会開催	
校友	(四)
昭七会——川辺支部総会——奈良縣支部	
結成——香川支部総会——公証人会役員	
就任	
現代実存主義の批判者としての	
キエルケゴール	H・ジョンソン(七)
海外望報	(九)
欧米漫筆	T・M・生(九)
ラヴィノ・フィールド・ハウス	
「懐視」断片	石渡俊一(一〇)
学生	飯田正一(一一)
西瓜	錦方貞亮(一二)
惠曇地方の実体調査余聞	春原源太郎(一七)
大学図書館随想	大山綱憲(一八)
編集後記	

日 "The New Republic" に寄稿した "On the Two Sides of the Eastern Sea." は一九二九年一月二日発行の "Characters and Events." (2 vols.) のうちに収録されている。

x

日本から中国へは、僅かに三日ばかりの船旅だが、その距離近い割合に、これほど対蹠的にくいちがった二つの世界も珍しかろう。単に風俗習慣や、生活の方式の相違なら、世界のどこへ行つても同じことだが、こゝでは思想から信仰から、同一の事件に対する解釈意見までも、まるでちがうのである。第一日本人は少々神経衰弱気味だが、中国人は至つてのんきにゆつたりとかまへている。日本人は自分に対する他人のおもわくに一々神経をとがらせるが、中国人は無頓着なほど一切気にかけない。日本人よりもずっとざつとばらんで easy-going で、身なりはむさくしいが概して人間味がゆたかだ。日本人も尊敬すべき特質をそなへていることは認めるが、それが同時に人々をひどくイライラさせる日本人があつたの狭くしい山岳国から、今日の文明を築きあげたのは、一つの驚異にあたいするが、よく見るといささか over-made である。何から何までも規則づくめで、石で手をつめたようなぬきさしならぬ切迫づつた感がする、その芸術的業績は礼讃に値するが、芸術美と人工美とをごっちゃにしている。日本から中国へ来て見ると、いかにも解放されて重荷をおろした気ばらし気分にはつとして、肩のシヨリもはぐれて来る。中国人はのんきそうにノラクラ怠けているようだが、結局長い月日の間には「永遠に氣をつけ」(eternal attention) 姿勢の日本人よりも、大器晩成でなことになるのじやなからうか。

x

つぎに日本人は沈黙寡言を徳日の一としてゐるのみならず、口を開いてもなかなか本音を吐かない。外国人に対しては特にそうだが、これけことさらに誤解を警戒するという意味ではなく、平生の習慣とエチケットがそうさせるのだらう。そして嘘をつくことも割合に平気だ。青島を中国へ返還するといつて、アメリカまでもダマしている。ところが中国人の話はあけすけで privacy ということを知らないのかとも疑はれる。古い諺にも中国には長もちのする秘密はないとある。自分の至らない、不得手なことを他人に告白するのにも極めて合理的である。何ごとでも袋小路に立往生するおそれのある積極的手段をとる代用として、こうして自分の欠陥を無遠慮にさらけ出すのではなからうかとさへおもはれる。日本人にとつては一つのタブーであり、関の山ヒソヒソばなしに上するにすぎないことすらでも、中国人と来ては屋上から大ごえでどなりちらす。たとへば中国の軍閥の首脳者たちが、日本の金でデクの坊になつてゐるということなど、日本人は妄りに口にすることを不謹慎とでも心得てゐるらしいのに、中国人はお互ひにお早う、今晚は、のあいさつのように廣言して憚らず、公然これを承認して論議を戦はしている。だから日本にいと、一たい中国をどうしようというのか、日本人の対中国外交には、英米等の外国向むきと、国内消費のむきと、その他二通りも三通りもあつてさつぱり見当がつかないが、中国人に接して初めてそれらはつきりとわかる。日本の軍閥と財閥とが共同の究極目標として中国を併呑しようとしている。中国にわたつて初めて極東全体の情勢を透視することが出来たが、危機はアメリカ人が本国で考へてい

るよりも遙かに重大だ。今から五年乃至十年もこのまゝゴタゴタやつてゐると、日本が緊張に堪へきれなくなつて自滅するか、アジア全体が赤化するかしれないかぎり、中国は完全に日本の軍事的支配のもとに吸収されるであらう。たゞしアジアの赤化と、日本軍事化とは fifty-fifty である。要するに日本は中国の併呑か自滅かの大ばくちをうつてゐる。

x

ウイルソン大統領の政治哲学にかぶれたわけでもなからうが、日本でも自由主義、民主主義が流行している。太平洋をわたる船の上で、同乗の日本人の口からしばしば De-mocratic の言葉をきく。いつもダブダブの船員服を着ていた一人の元氣のいい、教養のありそうな男が、ある日將軍の制服に威儀を正し、胸間に勳章の列を輝かせながら出て来て、自分は日露戦争の殊勲者だが、今や多年滞在中のフランスから、国人に世界の現勢とデモクラシーとを説くために帰国する途中だと吹聴する。日本は現統治の指導のもとに、到底不可能なことを実行しようとしている。原料や技術や科学的進においては専ら西洋に依存し、これらに因するかぎり西洋の思想と手段との導入を歓迎しながらしかも同時に、その特異な固有の道徳と、政治傳統とは一指もふれないで、そのまゝ保存し守株しようとしている。これらの点にかけては、西洋から學ぶいかなるものにも優つてゐると独善的に信じてゐるのだ。その起源からいつてもその運命からいつても、これも一つの選ばれた国民である。西洋の科学的並びに産業的技術を全部をつくりそのまゝ拝借しているにもかゝらず、非常な頑強さと執拗さともつて、封建的というよりもむしろ野蠻的ともいふべき道徳と、サムラ

イの軍国政治とを温存しようとしているのである。しかし、いかなる国民も、永久に二重生活をつづけてゆくことはできない。日本人の生活を見ても、すでにいたるところに、分裂の気配と緊張とが現われている。たとえ全力をあげて抵抗しても、純西洋的な思想と志向との侵入を無限にいとめるわけにはゆかない。それは徐々に忍びこんで来ている。世界に類例のない極端な反動的初等教育制度の実施されているのを尻目に傳統的な思想はだんだんと追つ拂はれつゝある。西洋思想の忍びこむ結果として、ウイルソン大統領のいわゆる民主主義のための戦争の勝利、カイゼル軍国主義ドイツの敗北とともに、日本にも自由主義民主主義の流行を見るにいたつたのも自然の成行であらう。また産業の発達とともに、西洋同様の労働問題なども紛糾し来り、従来のパタリズム、温情主義だけでは單純に処置出来なくなり、どうしても西洋流儀の新しい解決方法によらなければならなくなつていのである。しかしながら日本の自由主義者の前途はいばらの道であらう。かれらの誠意には疑いを容れる余地はないとしても、概して道徳的勇氣を欠いている。のみならず、皇民一家の思想や、万世一系の信仰や、皇室中心主義の觀念など、天皇制に関する神話が二重三重に骨がらみになつてゐるから、これの多くの掩護保護を攻略して、民主主義革命を成し遂げるのは、不可能とはいへないまでも、容易なことではなからう。对中国問題も日本の知識階級の自由主義者にもつと道徳的勇氣がありさえすれば、無難に合理的に片づくことと思われるが、かれらはわれらアメリカ人のように事の眞実を知らせられず、また自ら知らうとも努めない。おまけに西洋諸国の東洋侵略の歴史によつて、容易にすべてを自己防衛として正当づけることの出来る強烈な

愛國心があるので、それも当分は期待出来ない。

×

以上は、博士の談話による会見ノートを主に、
"Letters from China and Japan" や "Liberalism in Japan." ("The Dial") や "On the Two Sides of the Eastern Sea." (The New Republic) などを参照してまとめあげたものであるが、会見ノートには特に「博士のように日本の弱点を忌憚なく痛烈に書いたアメリカ人の会見談は、近頃珍らしい」と附記して或は日本はあまり急激に一等国に成り上つて、内容の充実があとまわしになつたので、名実相叶うようになるまでの前途程は遠し、これから本格的試練をのりきるための一苦勞だといつたり、或はまた婦人問題につき中国との比較において、東洋は男性文明が、何であり、何をなし得るかを示す適例である。おかしなことにはそこでは婦人の服従が、たゞ婦人のみに影響するものとして論ぜられてゐる。余の信ずるところによれば、中国の単に家庭的、教育的立ちおくればかりでなく、世界の輕侮をまねくその肉体的退化や政治的腐敗の著しい傾向や、公共心の欠乏やもみな婦人の生活條件の結果に外ならない。日本にもこれと同様の欠陥腐敗がある。たゞこゝではそれが組織化されているだけの相違である。二つの巨大財閥と二つの政党とは仲よく結びついているが、その旺盛な公共心は専ら国家的で社会的ではない。公共心というよりも愛國心といつた方が適當かも知れない。換言すれば中国の弱点とするところに、日本の長所があるようだが、しかし婦人の服従を根源とする欠陥は相等しい。この隠れたる日本の弱点が、いつかは日本を頓挫 (break down) せしむる時が来るであらうといつたりしたところから

察して、ちやうど明治の初期に、ドイツの憲法や、軍国主義や、教育制度に、外交方法をとりいれて、その制度文物を動搖とのうちに漂うている日本の情態が、ハラハラするほど危なかつかしくてたまらなかつたらしくも受けとられるからである。第一次世界戦争後と、第二次世界戦争後と、時をへだつること三十余年日本も形式的にはずいぶん變つたが、内面的には過渡の混亂期にある点において、あまり變つたとはいえない。故人の旧い觀察ながら、やはりなお生きているように思はれるのである。(七月十五日・紫雲山房において)
(文学部教授)

國文學

昭和二十七年
六月・第七号

定価 金八拾円

「輕み」作風に就いての芭蕉の教説……

広田二郎

伊勢蕉門………西山隆二

斎藤茂吉の作歌の態度………谷沢永一

淨瑠璃評判記解説………横山正

大阪府吹田市千里山

關西大學國文學會

振替大阪二五八四四番

學内報

文部省科省研究費交付

昭和二十七年文部省科省研究費は、左記三名の本省教授に交付された。

(文學部文學)

近世初期文學の法的研究

教授 飯田正一

(文學部文學)

ヒューマニズムとこれと対立するものとの問題(現代英米文學を通じて見たる)

教授 堀正人

(経済部一般理論)

銀行業務の理論的並に制度的研究

教授・講師 森川太郎

就職講座開講

六月二十三日より七月十九日まで千里山學舎に於いて就職講座が開かれ、多大の成果を収めて終了した。講座担当及び特別講義は左の通り。

貿易実務並に取引一般 賀屋俊雄教授

商業英語 水谷操一講師

英作文 小川忠藏講師

特別講義

百貨店経営と実務 近鉄百貨店加藤昌秀氏

アメリカの新聞界 大阪毎日新聞社石井壽雄氏

体育實技館起工式

予て本学教育後援会によつて計画中であつた体育実技館は七月三十日起工式を挙行、九月下旬完成を期して突貫工事に入つた。竣工後本学に寄贈され、千里山に更に威容を加えることとなる。

文藝講演会

本学世界文學研究会では、六月廿八日(土)午後一時から、朝日新聞大阪本社講堂に於て、文學講演会を開催した。講演者及び演題は次の通り。

挨拶 飯田正一

新劇運動について 辻部政太郎

現代フランス小説 伊吹武彦

現代文學の意慾 荒正人

ローマ法特別講義

六月十四日より七月五日まで六回に亘つて本学武藤智雄講師によりローマ法特別講義が行われた。

新聞學特別講演会開催

七月五日千里山學舎新館に於いて日本新聞學會會長前東京大學教授小野秀雄氏を迎へ新聞學特別講演会を開催、「比較新聞學について」の題下に講演された。

獨文學會總會

七月六日、日本獨文學會阪神支部第一回總會を本学千里山學舎に於いて開催、規約の審議、懇親会を行つた。各大学からの出席者四十五名。

堀・森川両教授地方講演

堀正人、森川太郎両教授は八月七日米子市に於いて開催された夏期文化講座に招聘され、講演会に出席講演を行つた。

訃報

松本壽史氏 前本学理事長松本壽史氏は、去る七月十八日逝去されました。謹しんで哀悼の意を表します。

同氏は明治三十九年本学卒業、弁護士となり大阪弁護士會長に推され、更に本学理事、理事長を歴任、後廣島高等裁判所長官より大阪高等裁判所長官に就任、現任に至つた。

尚葬儀は同月二十一日阿倍野新斎場に於いて執行され、本学より弔辭を呈した。

三谷教授令室逝去 三谷友吉教授令室喜美子殿予て病氣療養中の処七月四日逝去されました。謹しんで哀悼の意を表します。

教授出張

飯田正一・金子又兵衛・吉永登各教授

學内人事

柳原文、吉永孝雄各講師は、七月下旬から八月中旬にかけ、各十日間づゝ、大阪府教育委員會主催教員認定講習會に出講した。

七月三日付 經濟学部 津川正幸
七月十日付 法学部 藤田和海
中井 勇

副手を命ずる(各通)

學會開催

◇大学院國文科並びに文學部國文學科学生(四年次)は、六月廿九日、沢潟・飯田・金子・吉永教授引率の下に、桂離宮・修學院離宮を拜觀した。

◇文學部國文學科学生は、飯田・金子・吉永各教授と共に、七月六日、江馬務氏(元本学講師)の風俗研究所を參觀近世の服飾について見學した。

◇関西大學獨文學會は八月三日總會を開き、左の研究発表を行つた。

一、シエトルム—文學觀を中心に— 見次教授

一、「語野」Sprachfeldの構成に映じた「言語の世界像」 福本教授

校 友

昭 七 会

昭七会春の会合は六月二十七日宗右衛門町いろはで催し出席者は左の通り

戸根泰雄、藤原忠孝、原良人、藤山 昇、前田 三郎、久 寛巳、米田恒浩、谷口宗良男、山下邦 宣、西田昌弘、西尾孝太郎、國師親徳、福原克巳 行俊、鴨、泰原源太郎 (順不同、敬稱略)

川 辺 支 部 総 会

川辺支部は兵庫縣川辺郡及び伊丹市在住者二百二十余名を以て組織するものであるが、七月十三日(日)午後一時より阪急宝塚線中山寺の宝塚荘に於て大學側より岡野学長、和田理事を迎え總會を開催参会者二十九名、磯野支部長の開会の辭に次で会計報告、其他議事に入り可決後岡野学長及び和田理事の長校近況報告を承り談笑裡に自己紹介をなし懇進会に移る。老若入交りて團欒すること数時學歌を齊唱して快を別つたのが午後七時であつた。出席者左の通り。(順不同、敬稱略)

大學側 岡野學部部長、和田近二理事
支部側 磯野充實、小原忠雄、中平忠、長田 二、井上精一、山際一鶴、中平忠、長田 千里、今北浩男、筒井仙石、藤原 昭、西谷平、富川竹治郎、池田幸太郎、深 川 英、坂西好太郎、福竹益男、田口正春 森三男、君島一知、伊井孝雄、渡邊泰、 吉永茂、瀧井孝男、岡野昌夫、池田宏

奈良縣支部結成

奈良縣支部は、戦後自然解消のようになつていたが母校最近の発展に應えて新たに結成、七月二十日午後春日ホテル大廣間に於いて六〇名の會員を迎えて總會を開催した。當時特に和田理事、安井校友課長を迎え、最終、學歌の齊唱を終えた時は、一瞬感極まつて一同声なく、新たな感激一入であつた。

尚總會会上支部長に高橋正次氏(奈良市長)副支部長に志野寛治郎氏が満場一致で夫々推され、支部事務所を左の通り決定した。

事務所 奈良市水門町四八

吉田 孝雄 方

出席者は次の通り(順不同、敬稱略)

(奈良市) 本原進、北浦幸太郎、小松邦男、飯田 欣、矢野龍男、田中俊夫、末田政治郎、福山孝夫、田山久幸、野村正直、松原淳、岡田義一、鈴木要、向井俊之、澤渡文和、中井進、野見賢、大門博、野多雄、名田京、野多三郎、吉田孝雄、森本實治、岩本信正、松田弘、二塚正也、谷村経賢、武田英司、高橋正次、酒井源、宇田東隆、森田切、荒木和男、河合安雄、藤屋康一(高田市) 面谷勝(生駒郡) 大隈一夫、北川実男、松岡壽郎、木村正則、久保誠由、今井孝一、橋口正己(山邊郡) 中島正太郎、千田茂治、中村昭一(合林郡) 志野寛治郎、磯野昭英(宇陀郡) 合林信茂(宇智郡) 中善一郎、西尾昌松村常太郎、山仲孝昭(南葛城郡) 末田弘(北葛城郡) 岡本秀治(墨江郡) 武野隆一(吉野郡) 藤田京(高市郡) 松村善三郎、松江城夫

香川支部総会

香川支部は七月二十七日火曜日午後五時より坂出市海岸町坂出食堂に於て終戦後第三回目の總會を開催した。当日は支

部長福田繁芳氏が国会の寸暇を利用した東京より来讃したのを機会とし開催したのであるが、酷暑且つ大雨の為懸念されたにも拘らず大學側から安井校友課長が出席され、学校よりの寄贈として大學一覽及び有終紀念グラフ等を受け同氏より母校並びに校友会の近況報告があり議事に入る、支部事務所は従来坂出市役所総務課内、福岡良雄方であつたが坂出市駅前通り三井生命内、佐野正義(電話二四八六)方に變更した。次で高松、坂出、九鬼の各地より馳せ参じた出席會員のユ一モア交りの自己紹介があり懇親会に移り、福田支部長の発声にて母校の万歳を三唱、散会したのが午後九時であつた。(出席者氏名の記載は次号)

公證人会役員就任

本学校で先般各地公證人会の正副会長に選任せられたものは左の通りである。

- | | | |
|----------|-----------|----------|
| (大阪) 会 長 | 下条小野右衛門氏 | (大3 専法) |
| (神戸) 会 長 | 山 崎 敬 義氏 | (大14 学法) |
| (大津) 会 長 | 上 田 啓 次氏 | (推薦校友) |
| (鳥取) 会 長 | 山 下 文 次郎氏 | (推薦校友) |
| (東京) 副会長 | 長 本 元 男氏 | (明39 専法) |
| (岐阜) 副会長 | 兼松謙太郎氏 | (明37 専法) |
| (大津) 副会長 | 上 田 武雄氏 | (大14 専法) |

(八頁より) 永遠の神は實際にあの基督において啓示されたのだらうか、それらの事を吾々は証明することが出来るだらうか、それらは寧ろ何の証拠も無い矛盾、逆なのではなからうか、と。是れに對してキエルケゴールは次の様々答える、——成程、吾々はそれを証明することは出来ない。吾々は自己の生命を賭けての飛躍によつて左様な信仰に到達することが出来る計りである。新約聖書を通じて基督自身の言葉や行いを学び取り、それによつて各自が旧い人から新しい人間へと生れ代ることにおいて左様な福音に與ることが出来る計りである、と。

更に續けて彼は次の如くに云つていゝる、——吾々にとつては、吾々の救主としての基督を信ずるか、それ共信じないで彼に反逆するかというの二つの途が示されるばかりである。第三の途はない。第三の途を基督は残して置かなかつたからである。それだから吾々は此の二つの「あれかこれか」の中の孰れかを選ばねばならない。しかもその選択は一刻をも争う今直ぐにでなくてはならない。何となれば死は万人にとつて免れ得ない運命であり、その死は何時吾々の上に襲いかゝつて来るかも知れないものである。若し吾々は躊躇してその決断を延すならば死が吾々に代つて決断して下さるうから、と。

大略以上の様なジョンソン博士の講演には本學關係の諸教授や學生達ばかりでなく大阪哲學協會の會員も聴講した。また講演後以文館で茶話會が開かれ、熱心な質疑応答や談話が交わされた。我々は深い感銘を受けて、午後六時頃博士の辞去を見送つたのであつた。

現代實存主義の批判者としての

キエルケゴール(講演要旨)

ハワード・ジョンソン

本誌前号で紹介されたように、Prof. Dr. Howard Johnsonは去る六月廿一日午後一時半から約二時間に亘つて、本学大学院教室で、上記題目の下で講演せられた——関西学院大学講師土山牧蕪氏の通訳により——。同博士の丁抹原典からしての極めて造詣深いキエルケゴール研究は、米國でも屈指の權威として矚目されている。本稿は右講演の要旨を筆記したものであるが、速記の不慣れその他のために、博士の真意を歪め誤り要点を逸した点多大ではなからうかと疑懼の念に堪えない。従つて文責は偏に記者にあることを茲に云い添えて、今は既に歸國せられたであろう同博士に対して遙かに心からの御詫びを申し上げると共に、深い敬愛と感謝の情を新たにす次第である。——田中照筆記

私はキエルケゴールの傳記や閣歴ではなくて、彼が内心的な不安から真実の基督教の信仰へと突き進んで行つた思想展開の跡について語りたいと思う。即ち彼において独自のあの実存主義宗教哲学が構想されるに至つた過程について概観したいと思う。

キエルケゴールは明かに予言的思想家であつた。彼は今から百年も前に、即ち西欧の文明が不斷の進歩と隆盛とを誇つていた樂天的時代において、人類の文化と文明とはいつかは破滅に瀕し、人類はやがては困惑と絶望との深淵に陥るより外なからうと予見したのであつた。どうして彼はそのような予見に到達したのであるうか。それは惟うに、十九世紀の西

存在が何物によつても支えられて居らず、無の深淵に臨んでいることに対する苦悩の情である。キエルケゴールは誰れ人よりも夙く又鋭く、このような人間存在の根源と真相とを予見し洞察したのである。そしてその本源的な不安から免れる途が何処かに見出されはしないかと、自己の生命を賭けて苦闘した人であつた訳である。

彼は自らの生涯を賭けて次の様に問うた、——此の世界は如何なる世界なのだろうか、人生は如何なる意味をもつてゐるのか、自己とは如何なる存在であり、何の為に此の世界に生れ出たのであらうか、と。そしてキエルケゴールはそれに対して次の様に答える。——吾々には絶対に疑えない確實な事柄が二つ存する。一つは人間は必ずいつかは死すべき存在だといふ事であり、他は併し私は未だ死んで居らないのだから此の與えられた人生の如何ようにでも選択して——何となれば此の場合何の選択もしないといふこと自身が実は一つの選択であるのだから——、生き得るといふ事である。従つて人生は仮令如何に東の間のものであるにせよ、恒にそれは各自の自由な選択と決断とに基づけられて居り、此の決断においてこそ各自に固有な実存と自由とは実現される。且つあの凡ての人間によつて根源的な不安も亦、此の実存的選択によつて克服されるより外はない。しか

も此の実存的選択には三つの段階が區別される、と。

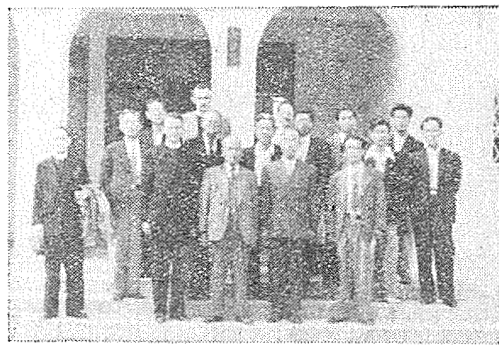
然らば三つの決断の仕方とは如何なるものであらうか。第一は美的実存の段階であり、快樂主義者や幸福論者において見られる生活態度である。即ち凡ゆる領域において次々と新らしい感性的享樂を追ひ求め、次々と品を變えた氣晴らしの慰戯に耽る態度である。氣紛れで不安定で非現実的で刹那的な生き方である。併し此の様な生き方は結局は再び倦怠と憂鬱とに陥らざるを得ず、揚句の果ては死の不安と絶望とに歸着せねばならぬ事になる。そこで人間は新しい決断によつて第二の生き方へと飛躍せねばならなくなる。

第二の生き方は倫理的実存の段階であり、禁欲主義者において堅持されているような様式である。即ち断乎たる意志をもつて情欲に打ち克ち、普遍的義務に従ふことによつて永遠にして絶対的な自己を実現しようとする態度である。又様々なる實際生活と結びつくことにおいて飽く迄も現実的人間にならうとする態度である。それは一方では、今日のサルトルにおいて主張されているような無神論的ヒューマニズムに連結するものでもあるし又他方では、世界の諸悲劇から脱離して一學に絶対者に冥合しようとする神秘主義——それはトロエルチによつて文化の危機時代には現れ勝ちだと説かれてい

る——に連結している生き方でもある。それは死を賭することにおいてこそ真の自由が発揮されるという不撓不屈の意志生活の立場である。併しキエルケゴールによるならば、此の段階は宛かも沈みかかっている船の金具に磨きをかけているようなものであり、吾々に窮極の救いと平安とを齎すことはできない。そればかりの至難事を吾々に要求する立場である。又例えれば神祕主義は一方では如何に深い意味を含むにせよ、労働者や貧民窟の人々を救い得る思想とは考えられないからである。

そこで吾々は更にまた飛躍と決断とをせねばならなくなる。そしていよいよ第三の宗教的実存の段階へ到達するのであるが、これには宗教性Aと宗教性Bとの二つの型が区別されねばならぬ。先づ宗教性Aは既にソクラテスやプラトンにおいても窺われるものであるが、まさにカントの道德的有神論において最も代表的に表現されている立場である。カントによると神の存在や意思の自由や靈魂の不滅などは、理論理性によつては到底証明されぬけれども、実践理性によつては必然に要請されねばならない。吾々は道德法に嚴格に服することによつてこそ正義公平なる神の存在や来世での賞罰を承認することになり、かくして絶対者との関係や永遠なる祝福や至上の善を與る——純粹道德意志の根柢において——ことがで

きる様になると説かれる。併しキエルケゴールはかかる内在的な有神論の立場に安住することができなかつた。何となれば此の立場では神の存在が要請されても未だ証明はされない。又神から與えられた完全な法則に限りなく、従うことは到底罪深い吾々の堪えられないところである。此の立場に止まる限りの人間は罪の



會後記念撮影(大學院前)

宣告と死の刑罰を甘受せねばならず、その為に再び絶望に陥るより外はないからという様な諸理由によつて——。

そこでキエルケゴールは最後の飛躍を即ち超越的な愛の神への信仰、他者からしての救済という最後の決断を試みる。かくして到達される段階が宗教性Bであり、それは正しく基督教的信仰者の

実存様式に外ならない。此の様式の中には元來二重のパラドックスが含まれている。一つは永遠なる神が此の時間的地上に啓示されていることであり、今一つは時間の本質をもつ人間がそれにもかゝらず信仰を通して永遠なる神を結びつき得るという逆説である。周知の如く基督教における永遠なる神は、特定の時、特定の地で生れたらいて最後には十字架にかけられた特定人において自己を啓示している。これは希臘の知解の域を全く超えて出ている思想である。希臘哲学にあつては、時間は始めも終りも無い円環と考えられ、歴史は輪廻的な無意味な流轉と見なされた。人間はかゝる果しなき時の環流から永遠静止のイデア界へと超出することによつて救われると考えられたのであつた。然るに基督教においては超越的な永遠者が時間の円環を突き破つて自己啓示し、その永遠者が時間を創つた「初め」であると共にまた時間を完結充足せしめる「終り」(目的)であることになつた。時間は円環ではなくて、「初め」から「終り」へと直線的に進んでゆく瞬間の連続となり、その「初め」と「終り」との中心点に基督——まさに此の特定の歴史的個人において永遠者が時間の真唯中に啓示されたのであるが——が位すると考えられる様になつた。従つて人類全体の歴史も亦無意味な輪廻や循環ではなくて、時間の中心点に位する基督の

榮光と言葉によつて意味づけられ解決されるものとなつた。しかもその基督は一方では神の子であり乍らも、他方では全人類の罪を代り荷つて十字架にかけられた罪人であつた。基督によつて宣べられた神は吾々の永遠の生命を與える神たると共に、また無限なる愛の神でもあつた。それだから基督と基督によつて語られた神を信ずる人々は、如何に力弱く罪深い存在であらうとも、罪の重荷や絶望から救われることになる。眞の基督教的信仰を選択する限りの人々は、不安の代りに信頼を恐れに代りに勇氣を、絶望の代りに希望をもつことになる。即ち有限なる時間的存在であり乍らも、永遠なる神の愛に懷かれることとなるのである。

キエルケゴールは予言的思想家たると共にまた偉大な心理学者でもあつた。彼はその精微にして深徹な心理分析の結果として、この様な基督教的信仰——宗教性B——をもつて、窮極の実存様式、究極の飛躍及び決断と考えたのである。そしてかゝる眞実の基督教的信仰を一旦選択したならば、そこには全く新しい価値体系、全く新しい道德が開けて来る。又凡て人間にとつて本源的な不安や絶望から終局的に救われることになると説いたのである。併しそれでもなお人々は次の如き疑問を提起するかも知れない、——本當に基督は神の子であつたのであらうか、

(六頁につづく)

海外彙報

欧米漫筆

一、フィールド・ハウス

本誌第二四九号に將來ラ・ソルボンヌに於ける大アンフィテートルに似て而かも非ならざるものを本学にも持ちたいと云ふ夢を記したが、更に又もう一つの夢をこゝに述べる。それはフィールド・ハウス (Field-house) を建設したということである。

フィールド・ハウスはアメリカの諸大学で有たれるに至つた比較的近來の施設であつてすべての体育実技が一棟の屋内で行ふことが出来、同時に又音楽堂、演舞場、劇場さては大講堂としても使へるといふ万能ハウスである。さきに米諸大学にこの万能館のプランその他参考資料を照会したところその求めに應じ極めて懇切に種々の材料を送つてくれた。プリンストン大学の一書に曰く「吾々は完全な意味に於けるフィールド・ハウスを持たないが近くのローレンスヴィル学園 (Lawrenceville school) がアメリカ第一の立派なフィールドハウスを持つておるからそのプラン、写真等を貴学に送るやう依頼した。そして同ハウスは吾々プリンストン

ニアンに対しても羨望的である」と。この度学園からの材料を入手したからその解説につき体育学専門の石渡俊一氏を煩はすことにする。因にローレンスヴィル学園はニュー・ジャージー州プリンストンを距る北西五哩の一小邑に在り一八八二年グリーン財團の寄附により改組され英國流の大学予備門的高等学校で恰もハロー又はラグビーに當る男子のみを容れる理想的な学校である。

二、ダリウス・ミヨー

今から二十有余年前私がパリでダリウス・ミヨー (Darius Milhaud 1892—) 日本ではミローと発音されるのを屢々耳にするが、これはミヨーである。本人がミヨーと云つてゐるから間違いない」と知合になつた当時日本で彼の名を知れる人は余り多くはなかつたであらう。それが今日フランスに於けるいな世界一流の作曲家としての彼の名を知らぬ者は少ないほどに有名になつた。昨今ラジオでもしばしば彼の作品が放送される。先日彼から終戦後始めて一書を受取り彼がまだ有名にならなかつた当時の語話を出し今昔の感にたへないものがある、ここにその一を紹介する。ポール・クロードルが大使としての日本在任中一九二二年に書き下

した象徴樂劇「女と影」(La Femme et son Ombre 1923) をミヨーがオペラに作曲してこれをパリで上演しやうとしたが関係者がミヨーの作は新らし過ぎるとか、奇を好むものとか何だかんだと文句をつけて上演を拒んだ。そこで遂にこれをベルリンに持つて行つて発表したと云ふ。これ今昔の感にたへんといふ所以である。この「女と影」は、一人のサムライを中心としてそこに展開する心理的葛藤を描寫した作品、かつて一九二三年帝國劇場に於いて音楽伴屋佐吉、舞台裝置鍋木清方、振付松本幸四郎らの各氏の担当で初演され、多くの反響を呼んだものであつた。その後クロードルの詩や戯曲などにつきミヨーが作曲した佳作の数は頗る多いがそれも決して偶然ではない。即ち彼は音楽愛好の家庭に育ち年甫めて十五にして既に作曲したと云ふほどに幼少にして樂才に富み長じて国立音楽院 (Conservatoire national de Musique et de Déclamation) に学び拔群の成績——フリ及び褒状 (Prix et Accésits) ——を以て同等院を出たが間もなく第一次世界大戰に會し彼は一九一七年より十余年間在伯国公使館に勤務することになつた、そしてそこに当時公使であつたポール・クロードルを見出したのである。一九二九年パ

リに歸るやフランス音楽を革新せんと烈々たる希望にもえる同志を糾合して「新人会」(Société des Nouveaux Jeunes) を組織した、この新人会は後に有名な六人組 (Groupe des Six) にまで發展したが彼は勿論その第一人者である。なお彼の近状として、夫婦でパリとアメリカとを往來して彼地の諸大学で教へて居り又私がパリ滞在中二三才であつた息ダニエルは画家になつて居るなどと書いてあつた、画家のダニエル君も恐らく両親に似て音楽に於ても亦非凡のタランに恵まれて居るであらう、やがては繪で聞へるか音楽で知られるか所謂アングルのヴァイオリン (Violon d'Ingres) であるかも知れぬ。因にポール・クロードルは老いてます／＼壯、たまたま今月で満八十四才になるが、ブラングの別墅で盛んに筆をとつて居るそうである、彼と至つて昵懇なアンリー大使夫人から受取つた最近の便りの中に Claude est inouï, il rajoute chaque année, on le joue Partout! 「クロードルは前代未聞の偉材であり、彼は毎年若返る、彼の作品は至るところで上演されて居る」とあつた。

三、シュアレスとクロードル

クロードルの話の序になお一言す

る。前々号にアンドレ・ジイドとクロードルとが交換した書信の集録を紹介したがその後更にクロードルとアンドレ・シュアレス (André Suarès 1868-1948) とが取りかはした書簡の蒐編 (André Suarès et Paul Claudel, Correspondance, 1904-1938, Gallimard, 1951) を入手し目下繙読中であるが是亦前者に劣らず面白いから一読を勧める。アンドレ・シュアレスはフランスの作家でその作品の多きことを枚挙に遑がない、共産主義とナチスに反抗したことは能く人の知るところである、師範大学の学友ロマン・ロラン (Romain Rolland 1858-1944) があつた。(T・M・生)

ラヴィノ・

フィールド・ハウス

永年吾が国の体育指導者並にスポーツマンが夫々の立場に立脚して室内体育館 (Gymnasium) を求める慾望は常に強い叫声となつて為政者を激しく追求して全国に相当数の而も可成り満足し得られる施設を得たことによつて日本の青少年の体位の改善に貢献したことは卒直に認められる。

併しながらアメリカから直輸入された体育館のありかたも現在ではもう過

去の歴史に一日一日と追ひのけられてゐる之にかわつた全く新しい講想による体育スポーツ施設の新発足がアメリカの各地に強く盛り上つてきた、それはフィールド・ハウス Field House と呼ばれるもので室内体育館の構想を数十倍大きく各種目のスポーツを年間通じて実施出来るよう企画されたものである、アメリカと言わず吾が国も風雨其の他の事故で戸外スポーツを完全に実施出来る日数は予想以上に少ない、室内体育館の施設は之等の欠点の一部分を修正したがパーセンテージの上からは低率に過ぎない、こんな欠点と盲点を出来る限り取り除いて進歩的な面を凡ての角度から精密に研究して、スポーツ文化の殿堂に築き上げてきたのがフィールド・ハウスである。

アメリカの第一流の大学であるハーヴァード・エール・プリンスストン・コロンビア・ニューヨーク・シカゴ或は海軍のアナポリス、陸軍のウェストポイント其の他の大学でもフィールド・ハウスの要望は極めて強いものがあるにもかかわらず未だ実現していず遂にカレドニア級の大学に新しい、フィールド・ハウスが設立されていくのはアメリカを知るものにとつて仲々興味のある問題である、恐らく現段階より遙かに大きな構想のものが将来を約束づけているの

でなからうか。学報表紙を飾る Lavino Field House はプリンスストン大学当局の言を借りればアメリカ第一のものとの折紙がつけられている。規模の壯大、施設面の充実、親切的設計は、充分に総合的役割を果たしている。

全長三四呎巾二二六呎の二階立建築と云つては実感が伴わないが概算全長一〇〇米以上、巾七〇米を頭に画くと、かすかながら全貌を掴むことが出来る、これを大きく六つの部分に大別して説明すると次のとおりである、(A) 大競技場 三一三呎巾一三四呎高四四呎で光線は天井からの天然光線と全長一哩に及び螢光燈があり競技者の影が映らない理想的なものである。十周一哩のトラック、体操競技、野球練習、籠球、排球及び凡ての室内競技は此処で処理できる。勿論観覧席は競技場と完全に分離されているがシート数は明示されていない、これはコマーシャルなものでない学校施設として重要視されていないことによる。

(B) 附帯施設 総アルミニウム製窓全館換気装置、特にシャワー室と脱衣室の換気は三分半毎に完全排気、温水設備、五九六人分生徒用スチール製脱衣箱 (筆者の推測だが全生徒数のものと思われる) 其の他医務室、運動用品販売所、乾燥室等……

(C) 学生食堂
(D) 記念品陳列室 (トロフィー、カップ、メダル其の他スポーツ関係記念品を常時陳列す)

(E) 室内水泳場 全長七五呎巾四五呎六コース最大水深十二呎で一往復五五〇碼のプールで、五一二の観覧席を持ち移動式の審判台其の他の必要品を備えている。

(F) バスケケットボール公式試合場 長さ八十五呎と巾五〇呎、観覧席五二で観覧席の少数はAと同条件でコマースナルな背景を持たないことゝ生徒数から考慮してこの辺にとどめたのは賢明な施作といえる、

ラヴィノ・フィールド・ハウスは、前述の如くローレンズヴァイル学園にあるが、ラヴィノの名はこのフィールド・ハウスの寄贈者の名を冠して記念したものである。

以上でラヴィノ・フィールド・ハウスの概要を説明したが青写真によるとこれ以外に四面のバスケケットボールコート、八面のスクワッシュコートが整備されて実体に接しないだけにその豪壯さが偲ばれ一個人の力による貢献が如何に大きな足跡を運動史を通じて世界に残すことか日本人として考えなおさなければならぬ興味深い題目である。
(石渡俊一)

「懷硯」斷片

飯田正一

二三年前のこと、知合の本屋から、西鶴の「懷硯」が出た、と知らせてきた。零本だが、原題箋がついてゐる、といふ。わたくしは大きな衝動にかられた。「懷硯」は、傳來が極めて稀れであり、早大図書館に藏せられてゐるものは、確か原題箋を欠き、合本になつてゐる筈である。とすれば、原題箋をもつた「懷硯」の発見は、たとへそれが零本であっても、そこに何か新しい発見を含む可能性が、無いとはいへない。しかし、さうした珍づらしいものである以上、零本といつてもわたくしなどには、到底手が出ない程度のものかも知れぬ。わたくしは迷つた。そして、数日経つて、それが天理図書館に入ることになつたと聞き、何かしらはつとした。天理ならば、当然落着くべきところに落着いたわけだからである。それ以来、わたくしには、「懷硯」のことが、妙に頭にこびりついてゐる。

西鶴の文学を、本質的には説話文学であるといつたら、云ひ過ぎであらう。或は誤りと断じていゝかも知れぬ。しかし西鶴の文学が、説話を契機とし、説話を

中心に展開するものであることは、恐らく否定出来ないであらう。彼は、「西鶴諸国はなし」の序において、「世間の廣きこと、国々を見めぐりてはなしの種をもとめぬ」といつてゐる。「懷硯」は、この「諸国はなし」と同じ系列に属する作品であつて、こゝでも彼は、「しらぬ山しらぬ海も旅こそ師匠なれ」といふことばを肯定し、さうした意味に基いて、諸国の咄を書きつづつたといつてゐる。そして、これが西鶴のすべての作品を規定する一つの基本的な性格でもあつた。けれども、西鶴が、單に説話を説話とし、奇談を奇談としてのみ取扱つたのであつたならば、廣い世間を見よといふ主張は、固陋な見解に対する烈しい町人的な抗議として呈出されたものであるとしても、それだけでまだ新しい文学を生むための必要な条件とはなり得なかつたであらう。そこには、さうした説話や奇談を、作者が、どのやうに解釈し、その解釈をいかに文学に実践したかといふことが問題となつてくるのである。そして西鶴は、「是をおもふに人はばけもの、世にない物はなし」といふ思考の下に、人間の優位を認めて、超自然的な怪異や奇

談さへも、すべて人間の立場から理解しようとしたのである。

秋成の「春雨物語」は、最近、天理本・漆山本・板山文庫本など、相ついで刊行され、注目をひくやうになつてきたがその中に、「目ひとつの神」の一節がある。あづまの若者が、歌を學ぼうとして都に上る途中、偶々一夜老曾の森に宿つて不思議なものを見た。猿田彦に似た神人や、天狗を想はせるやうな修験者が、神殿から現れた目ひとつの神に迎へられて、酒宴をはじめた。猿と兎が酒がめを荷ひ、白い狐の女房が酌をした。若者は恐ろしさにおぼれてゐると、やがて神たちが若者を呼んで酒をすゐながら、都には物學ぶべき師もない、国に歸つて、隠れたらんよき師とめて心とせよと悟した。そして若者は、東国に赴く修験者の腋に挟まれて飛び歸つた、といふのである。目ひとつの神とは、左明を失つた秋成が、みづからをあはれみ嘲つたものであらうかといふ。神が、歌學びの道をしへて、自己の努力以外に道はない、といつてゐるのは、秋成の、堂上歌人たちに対する痛烈な批判を示すものであつた。しかし、それにも増してわたくしが興味を覚えるのは、秋成が、一体何処からこのやうな題材や構図を得たのか、といふことである。すでに雨月物語を著した秋成であつてみれば、かうした場面を

描くことも、或は当然かも知れないが、それにしても、「春雨」の精神は、雨月におけるそれと自ら異なるのを感じる。「雨月」と「春雨」を無条件で結ぶことは、必ずしも妥当とはいへない。中村幸彦氏は、檜の扇をかざした白い狐や、大きな酒がめを荷ふ猿と兎の紛本に、高山寺の鳥獸人物繪卷などを想像してをられるのであるが、そしてこれは確かに卓見だと思ふのであるが、同時にわたくしは、外に幾りどころとなつたものが何かあつたやうにも思へるのである。そしてさう考へるとき、「懷硯」卷二、「椿は生木の手足」といふ条が浮んでくる。さる法師が、行き暮れて、信田の森の下影に一夜の宿を求めた。そして、これも不思議なものを見た。——こゝから一寸原文で示さう。「かゝる所に靈しき姿せしもの急かしげなる足並しどろに、只今御本社よりの御使者と八葉の車跡かし、御名代なるは無礼するなど先走り此森の社壇開けば眞体葛の玉姫ときこえてしづかに歩み出たち向ひける時、使者車より下て抄取直し、今般の御祭礼御旅中御機嫌よく今宵祠に入らせ給ひ、京中の氏子共悦ぶ事限なし。付ては例年のごとく諸国御流を汲む無官の者に其功の仕方によつて、官位あるべしと子細らしく冠を撫でおろし、其の爲深草飛丸勅使なり」と名乗ると、葛の玉姫は座を設けてこれを迎へた。そして園中の狐たちを集めて、酒

もりとなり、次第に長じて芸盡しが始まり、果は大笑となつた、といふのである。信田の森から狐を点出してきたのであらうが、その狐たちが、飛子や遊女に化けた姿態に、西鶴の人間的な解釈や現実的な態度が見られるやうに思ふ。それはとにかく、秋成と西鶴と、両者の意図したものを別にしては、この二つの説話は、明らかに共通の筋や形式を持つてゐて、偶然の一致といふやうなものではない。「春雨物語」の構想はやゝ複雑になつてゐるが、神人や修験者を目ひとつの神が迎へて酒もりを始めるといふのは、確かに飛丸を葛の玉姫が迎へるといふ筋から生れたものに違ひない。

残る問題は、それならば、この説話を西鶴は何処から得たか、といふことである。わたくしは、それをまだはつきり突き止めてゐないけれど、この中世的な題材やその題材の近世化といふところには他の場合におけると同じやうな作者の手法が看取され、それだけに当然基くものがあつたと考へて、いゝ筈だと思ふのである。

×
「懷観」卷一、「案内しつてむかしの寢所」は、一種の運命悲劇を取扱つたものとして、いまのわれわれにもなほ新鮮な魅力を感じさせるものである。話はいふのである。

淡路の家島に久六といふ男があつた。

鰯網にやとはれて関東へ下つたまゝ、一年近くも消息を絶つた。其の年は海もいたく荒れ、難船も多かつたので、人々は久六を死んだものと思ひあきらめ、雄が女房を無理に勧めて、後夫を迎へさせた。ところが丁度祝言のその夜、久六は旅姿で帰つてきた。そして、「案内しつた顔に立入り、久しくあはざる女ゆかしく寢所に行けば」、女はすでに我がものではなかつた。しかも、後夫といふのは久六と年月遺恨のやまぬものであつたので、彼は分別して、先づ難破の次第を語り、その後心静かに女を刺殺し、相手の男を討つてすて、わが身も同じ刃に伏した、といふのである。作者は、久六の行為を、鄙びたる男の仕業には、神妙なる取置ぞかしと賞讃している。

他国へ出掛けて行つた男が、何等かの理由で、死んだと誤り傳へられる。妻が再婚する。その後で男が歸つてくるといふ悲劇は、必ずしも例に乏しいものではない。いや、戦争を契機として、われわると、さうした事実を、お互の周囲に、嫌といふ程経験してきた筈である。すると、これは、遠い昔の話として片づけてしまふ事も出来ない。これと同じことは今日の新たな問題として、現に解決を強いられることもある。

かうした場合、必要なことは、作家がさうした運命に直面した人々の生き方をどのやうに描いたか、といふことであらう。

う。作家の知性が、時代を規定する倫理を、いかに解釈したかといふことであらう。けれども、その点になると、西鶴は案外簡単な片附けたをし、久六の振舞を、神妙なる取置として賞めてゐるのであるが、それは、この時期における西鶴の、武士的倫理への共感が、かうした解決に価値を見出してゐるからである。そして、人生の悲劇を悲劇として受取らうとする愛情が、こゝには欠けてゐた。

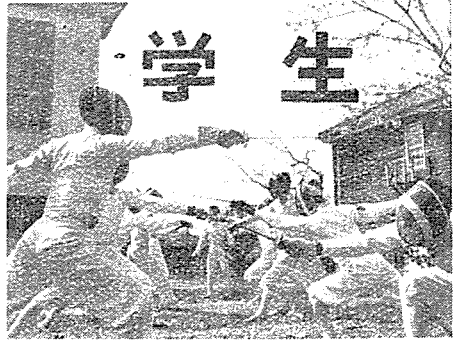
注意せねばならぬことは、西鶴は、この話をどういふ作家的興味から描いたか、といふことである。しかし、彼は、こゝでは全く奇談といふ説話的興味から描いてゐるだけである。久六を、女の結婚の当夜歸つてきたこととしてたり、二人の男を憎み合つてゐる間柄としたのは、いはば偶然といふものにもたれかゝつて外的な面白さを強調したもので、それだけ人間の追究を、おろそかにしてゐる感がないではない。そこへ行くと、「万の文反古」巻四、「南部の人が見たも眞言」は、同じ題材を取扱つてゐても、西鶴晩年の作品だけに、そこには、作家としての生長や、作家態度の正しさなどが窺はれるやうである。

利平といふ男、商売も思はしくないので奥筋へ旅商ひに出掛けたが、最上川の洪水で溺死したと傳へられた。女房は狂乱のごとく身もだえして悲しんだが、やがて百ヶ日も過ぎると、この家たてねば

二親への不孝と、無理に納得させられ、利平の弟と祝言した。それから二三日して、利平は無事に歸つてきたが、様子がかしいので、仔細をたづね、度々書状をのぼせたのに一度も届かなかつたのが不運だつたのだと、あきらめたやうであつたが、兄弟ともに一分立ちがたしと思ひ込んだのか、ひそかに同道して高野熊野に参詣し、山中で刺しちがへて死んだ。女房も家を出て行方をかくした、といふのである。西鶴の作品は、説話を契機とするものが多いから、同じ説話で、繰返して用ゐられたり、いろいろと切替ぎするやうな手続を経て用ゐたりしてゐるのが普通であるが、こゝでは、前の説話の骨組を、かうして殆んどそのまま用ゐてゐる。しかしそれはやゝ説話的興味に溺れたやうなところはない。説話は作者にとつて、内的なものを表現するための手段として用ゐられてゐるのである。そして作者は、悲しい運命に置かれた人々が、自己の責任において、その運命を解決して行くあはれさを見詰めてゐるのである。封建的な家族制度が、人々をかうした苛酷な運命に追ひ込んだとしても、彼は、それゆゑにこそ、そのどうにもならぬ運命を見詰めてゐたのである。家を出て行方をかくした女房の行動は、それがそのまゝ人々の果知れぬ苦難の道を示すものでもあつた。

(以下一八頁下段につづく)

学生



学友会、春の年中行事である文化祭が会場の関係で中止になった爲、文化諸部の活動も停滞の形である、学術研究部も同様である。破防法案を闘つて、相当活潑な動きもあつたが、全國的な反対の声も空しく議會を通過してしまつた。体育各部は、二三の部の全日本選手権、東西対抗試合を残して、シーズンオフに入り、各地に夏季合宿が計画されている。

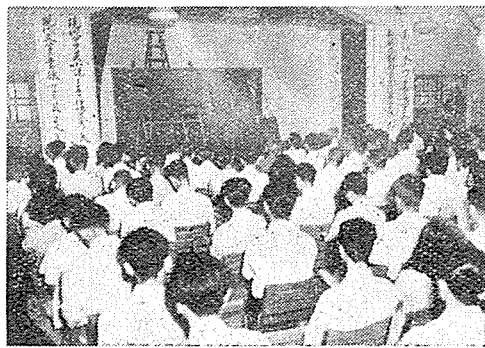
◎二部學友會 新入生歓迎會が七月六日大手前會館で開催された、軽音楽部のプロハセレナードスによつて大会の幕を揚げ、学長の挨拶、幹事長山本守昭の幹事會活動に就いて説明あり、続いて新聞部、牟田口主筆、応援團、多賀剛長の活動発表があり、副幹事長山本庄二の司會で、文化、体育、学研、三十一部の紹介

に各部々長の部活動発表があつた。紹介が終つて、文化、体育等の実技發表に移り、拳斗部の模擬試合に拳斗の見方、技術等の公開があつた、空手部は空手の型、瓦十枚を重ねて素手で破る秘技を見せ、フェンシング部は、ホイルだけではあつたが、フェンシングの基本と試合のテクニクの説明があり、騎士道と伴に發達した、スマートな競技内容を公開した。

次に、文化各部に移つて吟詠部の吟詠は先置松橋、和田、山中等の独吟、音楽部はハワイアンギターの妙なるメロディをスチール片倉敏夫、ギター井口、ウクレレ赤坂、ベース今川の諸君により数曲演奏、弁論は遊説部長山中等の熱辯に会場を湧かし、演劇部学窓座による公演、木下順二作「彦市ばなし」を坂本進の演出により彦市、小村金男、殿様 土江桂治、天狗の子 峰順子のキヤストで原作の諷刺を生かし満場を笑いに巻込む、好演であつた、演出者坂本のスムーズな演出が成功していた、応援團による学歌、応援歌、拍手等の発表があり、映画研究部の「本學紹介映画」に続いて、フランス映画「女だけの都」を上映、有意義に新人歓迎會を終了した。

◎二部文藝部 関西文藝第八号を發刊幹事會、文藝部員には無料配布、希望者にも無料で頒布しているが、部費に制限されて、半期刊行に終つているのは惜し

い、詩以外に見るべきものなく、佐藤、村田の創作も主題を見失つてゐるし、久野のドラマは、意途を著述し切れない舌足らずの作品になつてゐる、現在第九号の原稿を募集しているが、本格的な作品の応募を期待している、前号記載の文藝講演會を秋にも企劃している。(夏組は第二回文藝講演會場風景朝日新聞社講堂)



◎二部水泳部 七月二十六日大阪プールに於いて當部主催、二部學友會幹事會後援、二部全學水泳大会が開催され、幹事會各部より参加、二十五米プールの借切つて、一日を競泳に楽しく過した、二十五米自由型、平泳、背泳、五十米、百米と各三種目とも豫選を行い決勝入賞者三位までには、それぞれ學友會長、岡野學長の賞状、賞品が授與され、潜泳競技

に引続いて、幹事會各部二百米リレーが行われ、優勝チーム写真部には、応援團より優勝杯、二位吟詠部には優勝帽が送られた、当日は、山田學生部長、榎本次長、次田課員の出席あり、山田學生部長より、それぞれ前記の賞状及び賞品が勝者に授與され、挨拶があつて後、応援團員兼本の指揮により學歌斉唱、開放された、大阪プールの一般水泳者に因大學歌を聞かせ盛會裡に暮なじむ頃、有意義に會を閉じたのであつた。本年が第一回の催しであり、これは、夏の二部學友會の年中行事として毎年舉行せられる筈であり、年々盛大になつて行くことを期待するものである。

◎ヨット部 七月五日、六日の両日、西宮港に於いて、関西學生ヨット選手権大会が開催せられ、本學始め関西六校(但し京都滋賀地域を除く)の間に勝敗を競つたが、スナイプの漕者 広岡、西川の健闘よく、優勝候補関學大を破り、當部初めての関西制覇を遂げた、ジンギーでは御立、河合組の健闘あり第一日は二位関學大とは十二点差であつたが、第二日は最後まで勝敗の解らぬ熱戦であつた、一般には馴染み深い競技であるが、競馬を見ようという面白さが、ゴール寸前に帆網と梶一つで戦われるスリルがある。綜合得点では二位関學大と一点差であつた。出漕者は
スナイプ 広岡、西川

ジンギー 米田、御立、河合、大道、吉本、梶

●フエシング部 七月十二日、十三日の両日、朝日新聞社講堂に於いて、第二回、東西学生選抜及び全日本学生選手権大会が挙行せられた、普及せられていない競技種目にも関らず、相当の観衆を聚めた、第一日東西対抗は、新聞の豫想を裏切り、フルールは、十対八で西軍が優勝、エツベ、サーブルは、それぞれ十二対六で東西の優勝するところとなつた、第二日 学生選手権は、フルールに本学が出場、関東の雄 中央大と戦い、十二対十二の同点、主将千島に期待する処が多大であつたが、不敗を誇る彼に似合わず、動き悪く二敗が響き、不運な酒田のミスジャッチが禍いして、十六対十四とリードを奪れ、全日本の覇者中央大白井に宮川敗れて万事休した。

平常のテクニクを忘却した千島主将の不調がなければ絶対優勝を期し得たゞけに敗れて惜しまれる試合であつた。

殊に中大白井、本学千島の一戦は白眉の試合であつたが、タイミングと、剣の安定に一步優る白井には勝てなかつた。

(カワトフエシング練習風景)

●空手部 第二回神戸外大定期戦が、七月二日外大講堂に於いて行われ本学の連覇するところとなつた、特に本試合に始めての試みとして、従来、空手道試合になかつた採点法が採られ、凄蒼な激戦

が展開せられ、得点差は開かなかつたが全員勝と云う完勝振りであつた。個人優勝杯も、島田主将が最高得点で獲得、団体優勝杯と併せて本学へ持ち帰つた。出場者及成績次の通り

本学

神外大

坂根(初段) ○	外大負傷×段(参段)
入江(一級) ○	×櫻井(初段)
島田(二段補) ○	×川上(一級)
大西(一級) ○	×飯田(初段)
明地(初段) ○	×勝(参段)
成田(〃) ○	×中倉(初段)
村上(〃) ○	×梶藤(〃)
三木(〃) ○	×広田(〃)
兒子(二段補) ○	×小笠原(参段)

●航空部

本春ゴルフ部と伴に体育部に承認され、戦後初めて許可された新設部である、二月末、本春卒業の愛場君他

諸先輩の後援により着々整備、六月一日朝日新聞社後援の下に、東西学生航空連盟が結成され、櫻田教授を部長に迎え、毎週土曜日体育館に於いて航空講座を開き、戦後七年の空白を取戻すべく部員一同熱心に研究している、近く操縦席と模製機の完成に依り、操縦の実技練習に入り近く、朝日新聞社で完成を見るグライダの操縦に備えている。六月二十五日第一回実習飛行として、朝日新聞若月号に同乗、本学訪問飛行を行った他、八月下旬、信州霧ヶ峯に合宿ブライマリーの

実習操縦訓練を挙行することになつてゐる。

●柔道部 七月三日より一週日、昨年と同様、石川縣七尾市に合宿、到着、翌日最速金沢大学と対抗試合を行い、次の成績で本学が優勝した

本学

金沢大

若狭 △	△松井
渡辺 ○右体落し	×押鐘
長谷川 判定	○山田
清川 ○合せ投げ	×瀬戸
前川 ○内股	×宮沢
嶺 △	△長田
藤岡 ○拂腰	×大成
三浦 ○崩上四方固	×今井
原田 ○内股	×堀村
藤勝 ○大外返し	×北野
永原 ○背負投げ	×山下
堀川 ○釣込腰	×大門
宮川 ○大外刈	×生垣
林田 ○大外刈	×高橋
堀田 ○大内刈	×綿
野見山 ○判定	×近谷
一ノ瀬 ○内股	×木嶋

●政治學部(政治学研究部) 本年度春季政治学会懇談会を七月一日午後六時より天六学会議室に於いて開催、元京大教授、法学博士田村徳治氏出席され、川上法学部長、吉田会長参会の下に、再軍備問題を取上げ先輩、在学部員等の活潑な意見の交換あり盛會裡に九時過ぎ散會した。

尙当日午後千里山法文学会に於いて、田村博士に依る「日本の興隆の理論と対策」なる演題で講演を賜つたが、参会学生多数で、これも盛會であつた。
(協賛は当日天六学会に於ける政治學會)



●學部雄辯會 雄弁会では三十名が七月十五日より一週間、森澤治氏(本学先輩)宅に合宿、小豆島土庄に遊説を行った。猶土庄高橋等に講演会を開催、多大の成果を挙げた。

●短大辯論部(一部) 七月十九日より一週間春原理事大学院田口義行も参加して志摩半島に合宿、遊説を開催、映画会講演会を開いた。

西瓜

鑄方貞亮

西瓜は野菜か果物か。これを即答出来る人は中々以て頭腦明晰である。食うときはこれを果物と思い、畑にあるときは瓜・茄子同様これを野菜と考える。

夏の涼味は西瓜にビール。ビールについては語らまい。涼味をそよめるもの他の一つはお化けである。夏季興業の四谷怪談などその筆頭であらう。今は昔、むごたらしくも中味を抉り食はれた西瓜は悪童共の手によつてお化け燈籠に変化した。固り西瓜性来の容貌が然らしめた結果か、それとも西瓜に元来、魔性があつたのか。今時こんなことを申しては誠に相済まぬ次第ではあるが、女は魔性だと云う。ドイツには、女と西瓜とは割つて見ないと判らない、と言う俗諺があるそうなる。この点、如何にも西瓜は御婦人に因縁浅からざるものがありそうだ。

二

先づ、西瓜の名称であるが、宮崎安貞は云う。

西瓜、水の多き物なるゆゑ、水瓜と云ふにはあらず、是れもと西域より出でたる物也、故に西瓜の号あり。(農業全書)

これで一応、西瓜とゆう名の由来は判つた筈であるが、この元祿の大農学者の説に異論を唱えた人があるから頼もしい。斎藤彦麟である。

西瓜、一名寒瓜といひ、西域より出たる故に西瓜といひ、冷なる故に寒瓜といひ、水中に冷し食ふ故に水瓜といふ、今は西字を水の音により。(傍廂)

西瓜と書き、寒瓜と書き、或は水瓜と書こうとスイカの味に変わりはあるまい。何でも、六つかしい字や訓み方を嫌う御時世である。將來、水瓜の方が幅を利かさないと限らない。だが、こんな議論は本職の學者、先生に一任して先を急ぐ。

三

馬や牛は勿論のこと、犬・豚・鶏に至るまで血統を極めることは、畜産學上大事なこと、況んや嫁を貰う前に血統を調べて忽せにしていけない。先づ、本邦西瓜の由来を尋ねよう。支那大陸の西瓜も亦自然生ではなかつた。和漢三才圖繪に云う。

五代の先、瓜種已に浙東に入る。但

し西瓜無し、五代の時、胡嶠回紇を征し、此の種を得、始めて中国に入る。名づけて西瓜といふ、

五代といへば、今から凡そ千年も昔の話、三十人が西瓜を食つた歴史は甚だ古いと云はなければならぬ。ところが、この年数を三百年間割引した説もある。谷川士清である。

西瓜、西瓜の唐音なり、水東日記に西瓜は、元太祖西域を征してより始めて得と見えたり、(倭訓栞)

元の太祖は申すまでも無く世界最大の領土侵略者成吉思汗、しかし、まさか彼が東洋におけるあの美味しい西瓜輸入の本家本元だつたことを御存知の方は、よもやたんとは居られまい。それなら、西瓜は一体何時頃、我が国へ入つたか。蜀山人はいとも淡々と斯く語る。

西瓜は寛永の頃琉球より薩摩へ渡り夫れより江戸表へ下る。(半日閑話)より詳しくは、長崎夜話草にもの聞ころ。

是れも本唐にはなくて、西戎の地よりひろまりぬとかや、日本には九州に傳へ、薩摩・肥後の天草、肥前の高来などに多く作りて、夫れより諸国に弘まりぬ。京都へ流布せしは寛永の比よりとかや、関東へは又後に弘まれりとぞ、

寛永の頃だといへば、今を去ること約三百年、天の美祿を感るにふさはしい九

谷瀧、さては珍珠沢庵漬の誕生と同年である。沢庵和尚が西瓜の皮を漬けたか否かは兎も角、菊岡沾涼も略々同様の説をとつてゐる。

寛永年中琉球より薩摩へわたる、慶安の頃漸く長崎にあり、僧義堂の空華集に和・西瓜一詩あり、西瓜今見・東海一、割破含三玉露濃一、義堂は寛永のころの人なり、承応年中藤堂家の奥服所菱屋基長崎にて此の種を求め、勢州津に至りて太守にさしぐ、則ち其の者の第宅に種まきしむ、はなはだ出来たり、この種粗近国にありといへどもいまだ狭し、人又あやしみて食せず、寛文延宝の間、長崎より大坂へつたへ京・江戸へ廣まりて今さかんなり、(近代世談)

伊達騒動の眞最中に、不便な交通も便利なもの、大坂はあげて天下泰平、輸入西瓜の思惑に一思案、一儲けを企んでいた商人も居た筈だ。それなのに何故人々はこの美味しい西瓜を好んで食はなかつたか。博學・寺島良安はズバリと解答して余すところがない。

慶安中、黄蘗の隠元入朝の時、西瓜扁豆等の種を携へ来り、始めて長崎に種う。然れども亦青臭氣を惡む、或は飢汁赤色にして以て血肉に似たれば兒女特に食はず、(和漢三才圖繪)甘藷・南瓜さえも恐れ怪んで食べようとしなかつた連中である。西瓜におびえ

たとて別に不思議はあるまい。況んや、西瓜には赤いはらわたを抜き食はれてもお化け燈籠になる魔性があるに於いておやである。

四

人の噂も七十五日、否、親が死んだとて悲み嘆くは当座のこと、さては財産・かたみの奪い合いなど浅ましい輩は別としても、二三年も経てば、早、命目さえ忘れるとゆうのが凡愚の常、西瓜もやがては嫌はれず、民衆から愛される食物に成り上つた。

昔は西瓜は、歴々小身とも喰ふ事なく、道辻番杯にて切売にするを、下々中間など喰ふ事也、町にて売りても喰ふ人なし、女などは勿論也、寛文の頃より小身衆調へて喰ふ、夫より段々大身大名も喰ふ様になり、結構なる菓子になりぬ、西瓜大立身也、(八十翁囃昔話)

西瓜と合食の相棒・鰻と正に好一對鰻も亦曾ては全くの下司魚で下々中間などの食つたもの、少なくとも人並な人間の口にすべき魚ではなかつた。

さて本山荻舟氏は「本朝食鑑」の著者平野必大先生にも勝るその道の泰斗であるが、前引用を敷衍して、

これ等の先入観から、東京人の大多数は明治末年までこれを忌避した。利尿に特効があり、同時に腎臓疾患を治

するとの説が盛んになつてから、一般に及普したのは大正年間からである。

随つて、種々の加工が行はれ、あるひは氷菓子に作り、または洋酒を漉ぎ、砂糖を加へるのは普通になつたが、品質の優良なものは冷してそのまま食ふところに眞の味がある。(大百科事典)

と説いているが、トマト・バナナ等が一般に普及したのは、衛生家輩が親にも代えて大切がるヴィタミンAのお蔭であつた。利尿を必要とする下の病、さては美食中毒の腎臓炎等、凡そ社会的に不名誉極まる病氣恐きに西瓜を食ひ初めたとは、何と嘆かしくも亦愚かな話ではないか。東京人よ、一体御身等はあの美味しい西瓜に何と詫びる。

また、砂糖・洋酒をぶつけかけ、或は氷菓子にして西瓜を食うとは以ての外、茶匠利休が先刻これを誡めている。

飛喜百翁が利休を招きし時、西瓜に砂糖をかけて出だしければ、利休砂糖のなき所を食ひて歸り、門人にむかひ百翁は人々饗応することをわきまへず我等に西瓜を出せしが、砂糖をかけて出だせり、西瓜は西瓜のうまみを持ちしものを、にげなきふるまひなり、とて笑ひ侍りき、(雲華雜誌)

正にお説の通り。わざわざ貴重な砂糖をかけて嘲笑された百翁こそいい面の皮全く不敗愁傷の至りである。今でも茶人とうやう輩は兎角蔭で人を嘲笑する習性があ

る。筆者がお茶を好まない所以はこゝにある。

西瓜に調味は不必要、そのままパクつくのが、西瓜に対するエチケットである。「出女の口紅おしむ西瓜かな」、情緒でんめんだるものは感ぜられるか、これでは西瓜たるもの黙つては居られまい「コケットの口紅誇る西瓜かな」今やあまりにも無遠慮な御婦人方が多すぎる。

調味無用の西瓜もビール同様、冷たくなければ美味しくない。とは言ふものの過ぎたるは猶及ばざるが如し。電気冷蔵庫で冷しきつたビールのように冷え過ぎた西瓜も亦宜しくない。ところが昔の人は実に良い方法を知つていた。

西瓜・甜瓜ともに、指の爪にて処々搔破り、日中に日にあて、あつくなりたる時、陰処に取り入れ、能くさまして喰ふべし、冷かなる事氷のごとし、(廣益秘事大全)

何と名案ではないか。「まじないも馬鹿にならぬ」とは、独り京・清水のかうもり茶碗のみのパテントでは無いと見るマニキュアを施している御婦人方は特に掻き破るには恰好な筈、是非一度試して御覧なさい。

五

食傷する程西瓜を食つてみたいと願う人は、食後たらふく水を飲むことだ。西瓜の香ふく、いゝたる噓が出ること必定である。鼻祖とゆう言葉に恥ぢず、先づ第一に鼻が安心をする。トマトの香を嫌いながら食う人がいるかと思えば、西瓜

にも同様贅沢な人達が多かつた。

西瓜を食ひて後其の子を食へば、即ち瓜氣を噓せず、(和漢三才圖會) 若しや、良安先生も西瓜の香をお嫌いか。曾つて、朝鮮の使節が西瓜中毒を起したが、トウガラシ一服で全快したとはさもありそうなこと。

西瓜に食傷したるには青椒を一味きぎみて煎じ用ふれば、即座に瀉して毒を解するよし、徳廟の御時、朝鮮の聘使西瓜にあてられたる時、朝鮮の医これを以て、毒を解したるよし、浅草医師、荒川樂記の話也、天明二年八月十八日の朝聞之、(一話一言)

年月日は頗る明確であるが、著者わけ、先生(太田蜀山人)が朝これを聞くとあるからには、どうも無条件には信じかねる。

西瓜は鰻と正に同様、捨て去るべき部分がない。この点平野必大は流石に「本朝食鑑」の著者である。

大抵西瓜は全体一として棄つる所無し、其の皮及び白肉は煮て之を食ひ、或は青物に作る、其の紅肉は生食し、其の核及び仁は炒熟して之を食ふ。

(本朝食鑑)

誠にもつて有難い食糧である。

西瓜くふ跡は安達が原なれや何と勿体ないことではないか。くらしが楽になるまでは、お互に鬼婆にならぬよう御用心、御用心。

(經濟學部教授農學博士)

惠雲地方の實體調査余聞

春 原 源 太 郎

水郷松江からバスで四十五分、地名で言へば島根縣八束郡惠曇町を中心とする漁村の實體調査をすることが本学法律学会の夏休みの行事となつた。

今年の特色は昨年瀬戸内海の家島を中心に家族制度の調査を行つた体験からアンケート式調査を改めて、問題を限定しない聞き込み式調査に重点をおいたこととカメラの利用によつて能率をあげたことである。

特にこの地方を選んだことについては猪熊講師(本学)熊谷教授(阪大)の指導によるもので調査班としては一応この地方に関する各種の文献をあさつて基礎的智識を持つて行くことに努めたが現地には臨んで大学院の沢田君及び女子学生も交へた二十五名の学生が個別的調査を行つて基礎資料の裏証的調査を行つたことは一二の学者が實體調査として行ふことのできない効果をあげ得たと思ふ。

調査の結果については学会からまとめ報告されるので拾ひ話の抜き書きをしよう。

どこへ行つても面白いのは結婚の風習

であるが、ある書にはこの地方では同族同村内結婚を嫌ふ風習があると報告されていたがこの地方に來てみると青山、山本、足立などといふ姓が大部分、むしろ同村内結婚が原則で他村の人と結婚すると「あの子は村内で貰ひてがなかつたから」などと言われ、それは輕蔑した言葉である。少數の姓が支配的であることは日本の家族制度と言われていることが氏族制度ではないかとの疑ももつ。

結婚式の行われる夜、村の青年が惡氣のないいたずらをするとは全國的な風習のようだが、この地方では式場へ石の地蔵や錨を持ち込むといふ。「据りの良いように」「居付くように」といふ意味らしいが錨はいかに漁村らしい。

石の地蔵は外にも利用される。この地方では正月と盆は三日間絶対に仕事をしなはけない。若しその間に仕事をすることが發見されると地蔵さまを持ちこまれる。持ちこまれた家では三日間供物をしたうへ人を頼んで元の位置へ直さなければならぬ。

この三日間には同町内の橋を狭んだ二

つの浦民が喧嘩をする風習がある。これは村の掟を守り團結して生活を護つた遺風である。

村の青年團が定めた掟を破ると三四十貫もある石を、その家の入口に置かれるこれが違反者に対する制裁である。掟を破ることは滅多にないが、その風習は現在でもあるといふ。

平和な漁村にも舟の故障で領海を越したのかソ聯に抑留された者もあるといふ國際色も織りこまれ、ラジオや新聞によつて都市と田舎の文化は平均されているから、何か特別なものを期待することは愚と考へられるが、新しい時代に、こうした古い習俗や家族制度がどのようにして持続され、崩れてゆくか興味あることである。

昨年の調査に當つては税務署と間違へ頑強に調査を拒まれるといふような笑へぬ苦勞もあつたが今年は地元で積極的な協力を得て便利であつた。手結(タイ)片句(カタク)では漁業協同組合に保管される各種の古文書まで自由に利用させてもらへたが、片句では組合の好意で古文書が見せてもらへるといふので学生と一里余の山道を越して行つたところ、古文書が一杯つまつたまゝの呟を出されたのは嬉しい悲鳴であつた。手結までは水産片が借用証を入れて古文書を借出ししているが片句までは及んでいない。雑然と呟から出して見た文書の中には寶曆、

延享、文化、文政、天保など、八幡宮の奉納帳もあれば、欠落御断、村年寄任命庄屋、代役に関するもの等戸長以前のものが一通り見られる。

大敷、細敷類の類は漁村らしく、大敷などの漁法も聞いたことがあるとのことである。なかに狐持、人狐祈禱に関するお触書の如きものがつて、「愚昧の百姓町人」と書き連ねられているのは時代の差を思わせる。また伊達家の臣片倉小十郎先祖の廟所が片句浦にあることに關する文書があるので墓地へも参つた。

神無月に関する異説もきいた。われわれは全國の神々が出雲大社に集まるといふ神話か傳説かを信じていたが、單に神話として聞くよりは法史として出雲を中心とする統治支配の殘形と考へられないこともない。ところが惠曇町の隣村佐太にある佐太神社では神々はこゝに集まり協議が終つて散会後に出雲へ行くのが正説とされている。この關係はどう理解したら良いだろうか。

学会の調査に同行して、地方の有力者青年團、島根縣水産部、山陰新報の協力に感謝したい。特に先輩小笹晴士氏(昭四)が後輩のために面倒を見てやつて頂いたことは忘れ難い。(本學理事)

お知らせ

九月号は都合により休刊致します。

大学図書館随想

図書館 大山 綱憲

一、ライブラリアンの両面性

観念の世界に住み、観念の秩序を企てる場合、総てのものは、筆の先で動かすことが出来る。然るに、アカデミヤから見た、所謂俗なる世界、歴史の世界に於て、或一つの目的の爲に、夫に必要な歴史的条件を結集、整序せんとする場合、夫は、筆先は愚か、ちつとやそつとでは、びくともしそくない物許りであることに気が着くであらう。それは、時に、如何に絶望的であるかは、局外者には解らない。

大学図書館は、不幸にして、同時に、此の二つの世界に住まなければならぬ両機動物として運命づけられてゐる。そして、アカデミヤの世界に行つては蔑視を受け、歴史の世界に於ては、見捨てられ勝ちとなる。此の両面から尊重されることのない不幸なる両機動物は、実は、アカデミヤが抱つて以つて立つべき支柱なのであり、大学の経営成績が依存すべき重要な経営手段なのである。夫は、日本の民主化を裏付くべき新教育制度に於て、教育の成果は全面的に図書館奉仕に依存しなければならなくなつたからである。大学の経営当局者が、大学図書館

に重大なる関心を持ち、之が改善に苦慮されつゝある所以である。我々は、図書館奉仕の担当者として、此の歴史的課題を担い、その使命を果す爲に、亦苦慮してゐる者である。

図書館が二つの世界から尊重されてゐない理由は、確かに、現在の図書館員自体の内にも見出される。狭い専門の中に閉ぢこもり、物をマクロ的に見、マクロ的に考へる能力を欠いてゐること、基礎的教養の不足等は、その主なものであらう。之は自ら反省し、自己改善によつて尊重に値する者と成らなければならぬ。併し、一方、局外者の図書館員なるものが、ガラス戸越しに見下ろした図書館の姿を以つて、概念的に、図書館なるものを律し去つた憾なしとしない。之はもう一度、先入観念を洗ひ流した上で、つぶさに観察し直ほして臆かぬばならぬ。

図書館員に課せられた任務は、広範囲に渉る圖書を取扱ふに必要な一般的教養を積むと同時に、図書館奉仕と呼ばれる経営目的実現の爲に複雑多岐なる諸手段を、當爲として図書館学に学び、次に、當爲実現に向つて、人間存在を含めて質量を克服統一して行くに在る。そして、当然、その労苦の大半は後者に注がれる。之は單なるアカデミヤにも、單なる行政者にも、共に能くする處ではないのであつて、両機動物的ライブラリアンに

して初めて可能なものである。茲に専門職としてのライブラリアンの特殊な境地が在るのである。今、現想的なライブラリアンが在つたとしても、それは所詮、両面に於て同時に完全たり得ないのであつて、その不完全性は、此の両面的特殊性に由來するものであることを知らねばならない。(つゞく)

【編集後記】

◆本誌第二四二号に掲載された田中照教授の論文「社会哲学への道標」についてロックフェラー財團のフアーズ氏から「東洋に於ける他我の研究」として教授の論文のバック・グラウンドの説明を求めて來た。本誌がこうした交流に役立つたというのは全く嬉しい話でもあり、それだけに亦大きな使命も自覚する次第。

◆海外報のダリウス・ミヨ氏はラザエル亡きあとの現代フランス作曲界の重鎮。「六人組」の主唱者としてその多彩な作品と、ローマン的な作風は異色ある存在となつてゐる。この方面に興味のある方の爲に蛇足乍ら。

◆第二五一号を機に学報も心氣を一新しようと思つて代えて見ました。顔真卿の筆になる大唐西京千福寺多寶佛塔感應神文より集録したものです。

◆この巻にも、抑らず御執筆賜りました諸先生に厚く御礼申し上げます。(〇)

(一二頁より)

それにしても、西鶴が、この説話は、何によつて得たのであらうか。「新玉の三年を待ちわびてたゞこよひこそ新枕すれ」といふ歌を中心とした伊勢物語の説話は、女が、新しい夫と結婚したその夜、男が帰つてきたといふ偶然性の上に物語を展開させてはゐるが、それは人間の愛情や、誠実といふものの勝利を唱ひ上げてゐるのであつて、それを直ちに「懷視」の興とすることは多少躊躇される。「懷視」の説話は、或は、旅に出ては半年ほど帰らぬ事もあつたといふ西鶴の、實際の見聞が基となつてゐるのではなからうか。(文學部教授)

昭和二十七年八月十日印刷
昭和二十七年八月十五日發行

関西大学學報 第二五一號

一年誌代費三〇〇円(送料共)

大坂市大淀區長柄中通二丁目二番地
編輯人 松 生 和 夫

大坂市北區川崎町七
印刷者 西 井 幾 藏

大坂市北區川崎町七
印刷所 株式 金田 ナニワ印刷所

發行所 関西大学學報局

電話 堀川(35)一七五六番
振替 大坂二六七七二番

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和二十七年八月十五日発行（毎月一回十五日発行）

關西大學學報 第二一號・八月號

いちばん確実に
いちばん有利な！

貸付信託

受益証券

高利廻の配當豫想

5年もの	年9分5厘	見當
2年もの	年8分7厘	〃
1年もの	年7分6厘	〃

無記名 いつでも
お取扱いたします

貯蓄組合扱では
元金10万円までは無税です

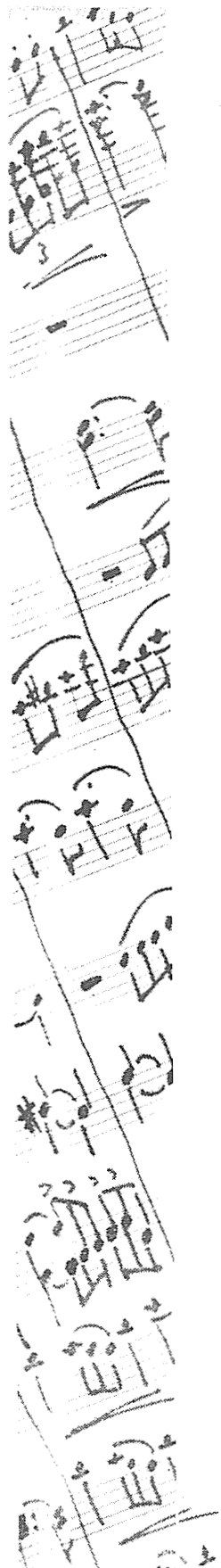
（案内書進呈いたします）



住友信託銀行

本店・大阪北濱 支店・東京丸ノ内 東銀座
名古屋栄町 金澤上堤町 京都東洞院六角
神戸栄町 広島紙屋町 福岡下土居 熊本横紺屋

定價三十円



關西大学学歌

The Kansai University Song



な ぶ は い ち づー じ ん せ い のー わ か
 け む は い ち づー け ん さ のー ひ ひ

mf *f* *ff*

mf *ff*

Red. *

き こ こ ろ に た た へ な
 を た の し み わ す ー れ ま

mf *f* *ff*

mf *f* *ff*

Red. *

ん じ 関 西 大 学 関 西 大 学 か
 関 西 大 学 関 西 大 学

f *ff* *f*

f *ff* *f*

Red. *

ん さ い だ い か く ー な ー か も き れ し き め し い
 かん さい たい かく ー な お ー か も き れ し き め し い

ff *ff*

ff *ff*

關西大學學歌

Tempo di Marcia molto energico
ben marcato [M.M. ♩=112]

山田耕筰 作曲

The musical score is written for a vocal soloist and piano accompaniment. It is in the key of D major (two sharps) and common time (C). The tempo is marked 'Tempo di Marcia molto energico' with a metronome indication of 112 beats per minute. The score consists of four systems of music. The vocal line is written on a single staff, and the piano accompaniment is written on a grand staff (treble and bass clefs). The lyrics are in Japanese, and the music includes various dynamic markings such as *f* (forte), *mf* (mezzo-forte), and *ff* (fortissimo). The score also includes some performance instructions like 'rit.' (ritardando) and 'cresc.' (crescendo). The lyrics are as follows:

二.し せん んの し う れ きゅう ひかー とく のー しじ んつ
二.し せん んの し う れ きゅう ひかー とく のー しじ んつ
わ た く ひ な き こ の か く
わ た く ひ な き こ の か く
えん わ れ ら た つ じ ん せ い のー あ け ばー のー に さ ん
えん わ れ ら た つ は つ ら つ のー せ い ばー しー んー に さ ん
た あ る り さん う せ あ つ ふ き る つ べー つ まは
た あ る り さん う せ あ つ ふ き る つ べー つ まは

關西大學學歌

服部嘉香作詞

自然の秀麗
たぐいなき
我等立つ
燦たる理想
学ぶは一途
若き心に
關西大学
關西大学

人の親和
此の学園
人生の曙に
仰ぎつゝ
純正の
讀えなん
關西大学
長き歴史

眞理の討究
たぐいなき
我等持つ
榮ある文化
励むは一途
日々を樂しみ
關西大学
關西大学
關西大学

学の実化
此の学園
激瀾の精神に
つくるべく
研鑽の
忘れまじ
關西大学
重き使命

自由の訓練
たぐいなき
我等期す
正義の奉仕
希うは一途
歩みさだかに
關西大学
關西大学
關西大学

自治の發揮
此の学園
人格の向上に
世に為すと
先進の
伝えばや
關西大学
高き權威